

維新史回廊だより



第23号
2015年
3月発行
年2回発行

編集 維新史回廊構想推進協議会
発行 山口県総合企画部スポーツ・文化局文化振興課
TEL 〇八三一九三三二二六二七
(山口市滝町一丁目)

維新史回廊だより第二三号をお届けします。現在NHKで放送中の大河ドラマ『花燃ゆ』にも登場する楢取素彦について、毛利博物館の小山良昌顧問に人物の紹介をお願いしました。

敬親公の懐刀楢取素彦

はじめに

*引用文中の()内は筆者注記

大河ドラマ『花燃ゆ』の主人公の文は、松下村塾の双壁として謳われた久坂玄瑞と結婚していましたが、玄瑞が元治元年(一八六四)七月の禁門の変で自害したため、若くして未亡人となりました。

吉田松陰の信頼厚い小田村伊之助、のちの楢取素彦は、その文の姉である寿と結婚していましたが、寿が逝去したのちは実母のすすめもあって文と再婚しました。即ち、楢取は松陰の妹二人を娶った男ということになります。

したがって、楢取はドラマ『花燃ゆ』では準主人公であると言えます。そんな楢取素彦とはどのような人物であったのか、紹介しましょう。



楢取素彦

(群馬県立歴史博物館蔵)

Q1、楢取素彦とは、いつ、どこで生まれ、どのように育った人ですか。
楢取素彦は文政十二年(一八二九)萩藩医松島瑞幡の次男として萩城下の魚棚沖町に生まれ、幼名を久米次郎と称しました。天保十一年(一八四〇)十二歳の時、明倫館儒官の小田村吉平に請われて養嗣子となり、伊之助と改称しました。小田村家に入った伊之助は家業の儒学の勉強を始め、藩校明倫館に入学して腕を磨き、やがて義父の跡を継いで明倫館の儒官となりました。

Q2、吉田松陰との関係はどのようなものだったのですか。

吉田松陰は天保元年(一八三〇)の生まれで、伊之助より一歳年少です。二人は、明倫館に勤務する講師陣の一人として、互いに認識していたと思われませんが、友人として互いの実力を認め合い、心を開いて交友を始めたのは、伊之助が嘉永四年(一八五二)江戸番役として江戸滞在中、松陰が兵学修業のため江戸に滞在していた時のことです。松陰は小田村を評して、「老兄(小田村)の気力、詩力、酒力はわが及ぶ所に非ず」と記しており、松陰から一目も二目も置かれる存在でした。



吉田松陰

(山口県文書館蔵)

江戸番役を終えて帰国した伊之助は、松陰の妹寿と華燭の典を挙げました。この結婚の知らせを受けた松陰は、その喜びを手紙で、

「寿妹儀 小田村氏へ嫁せられ候由 先々珍喜此事御同慶仕候 彼三兄弟（兄松島剛蔵 弟小倉健作）皆読書人 この一事にても弟（松陰）が喜ぶ所なり」

と書き送り、二人の結婚を祝福しています。また松陰は

「妹寿は性質が敏慧（聡く賢い）で、読書家の伊之助とは似合いの夫婦」とも書いています。

松陰は下田渡海に失敗し、萩野山獄へ移送され、その後、松下村塾で多くの塾生と学習に努めますが、安政五年（一八五八）再び野山獄へ投獄され、松下村塾の行く末が心配されていました。獄中からの松陰書翰には、

「投獄後は妹婿小田村伊之助と申す儒官これを主（つかさど）り居候 久坂玄瑞もわが妹婿なり 従弟久保清太郎と申もの隣家なり 此三人共村塾にて小生の志を継ぎ候也」

と書き、やがて、松陰東送の日が近づくと、

「村塾に彝堂（いどう）伊之助）先生在り、何ぞ吾が言を待たんや、塾生の大眼目は唯先生を尊崇するのみ」

と伝え、村塾経営の後継者に伊之助を指名しています。

しかし、安政六年（一八五九）伊之助は藩主の側に仕える御手廻組に抜擢され、藩主敬親の侍講となって藩務が多忙となり、松陰の期待も空しく、松下村塾の経営を顧みる余裕はなくなっています。

Q3、藩是転換のころには、藩主からどのような密命を受けていましたか。

文久二年（一八六二）七月、萩藩京都屋敷において御前会議が開かれ、孝明天皇の御意向に添って藩是が「破約攘夷」へと転換されました。この決定は、開国和親を掲げる徳川幕府の方針に叛旗を翻すもので、長州全体の存亡を懸けた重大な方針転換であり、萩藩が幕府から改易される可



毛利敬親

（毛利博物館蔵）

の説得に当たられたのです。

伊之助は敬親公の密命を帯びて密かに京都を出発し、岩国吉川家及び長府毛利家のもとへ走り、両支藩主に対して御密命を伝達・説得することになりました。

その説得の様子について、後日伊之助は「楯取素彦翁談話」で次のように記しています。

「その時分因循論（俗論）と云うのが岩国はそれが多くて、なかなか（敬親公の）命を奉ずる事が困難で、（中略）吾輩が八方説き廻って、監物公（吉川経幹）にも会って激烈に論争をした。それで、向こうでも本藩の命だからと言うので奉ぜられた。（中略）

長府も満朝俗論（親幕府）で困ったが、左京之助（藩主毛利元周）は重病だと云うて應對に出さぬ、（中略）御目通りしたいと云うても、どうしてもお会いにならぬ。私は本藩の命を奉じて来たのだから、長府公が一息たりとも御生命のある間は、御面会して命を伝えなければならぬと言うて、到頭病床でお会いなさったけれども、有無の返事が無い（以下略）」

長府、岩国両支藩への説得訪問の役を無事終え、復命した伊之助に藩主は小袴を下賜してその労を賞されました。

文久三年（一八六三）八月十八日の政変ののち、伊之助は側儒役から奏者役、小納戸役を経て藩主に近い奥番頭役の配下に所属し、その書記役である書物掛に昇任しました。

能性は十分にありました。支藩主たちが易々とこの藩是に従うとは思えません。そこで、藩主敬親は信頼する伊之助に密命を与え、支藩主へ

元治元年（一八六四）の正月早々、長崎聞役を拜命して長崎へ出張し開港地での異聞、夷船の出入り、異人の行動などを調査し帰国して報告すると、休む間もなく三月には再び長崎に舞い戻り、約半年間滞在して外国人から銃砲購入に関わる仕事に従事しました。

同年の七月十九日、京都に於いて益田・福原・国司の三家老に率いられた長州兵が禁門の変を起こして敗北しました。その戦闘で、義弟の久坂玄瑞（妻寿の妹文の夫）は負傷し、鷹司邸内で自決しています。享年二十五歳でした。

Q4、俗論党政権下では、どのような扱いを受けたのですか。

この禁門の変を起こした長州藩に対し、幕府は第一次の征長令を発しました。

萩藩が「破約攘夷」を藩是として以来、勤王を旗印に掲げる正義派が進めた施策が破綻した結果、幕府により第一次の征長令が発せられたのです。降伏した萩藩内では幕府に恭順の意を表する椋梨藤太を首領とする俗論党が政権を掌握し、三家老の首を幕府へ差出し、四参謀、七政務員を処刑しました。この七政務員の中には伊之助の実兄松島剛蔵も含まれていました。

御内命を帯びて東奔西走した伊之助の身を心配された藩主敬親は、伊之助に改名を勧められ、以後素太郎と称しました。

十一月、素太郎の行動が正義派の志士と気脈を通じたと云う疑義により、藩は素太郎を先ず「親類預け」とし、十二月には野山獄に投獄しました。素太郎の命は正に風前の灯火でした。素太郎は死を覚悟し、妻の



「楫取素彦翁談話」
(山口県文書館蔵)

寿へ遺言状を書いています。その末尾の文章はこうなっています。「賤しき胡乱（うろん）の者の仲間に入り申さず、土の楯を崩さず、婦徳を失はざる様心得有るべし」

Q5、薩長同盟の締結においてはどのような役割を果たしましたか。

元治元年（一八六四）十二月、高杉晋作は俗論党政権による三家老らの処刑を聞き、大いに憤って長府の功山寺で拳兵して俗論党政府への叛旗の烽火を上げました。この高杉拳兵を契機として、奇兵隊など諸隊の正義派軍が勝利を納めて再び藩政を奪還した結果、素太郎は許されて目出度く野山獄から解放されました。

再び藩政権を掌握した正義派は、藩是を「武備恭順」と定め、表面上は幕府に恭順し、藩内では密かに武備の充実に努めて、反幕府の態勢を固めていきました。

出獄後の五月、素太郎は再び藩主敬親の御密命を帯びて、太宰府へ移されていた五卿の許へ赴き、御密命を奏上しました。当時、長州藩内では「御恭順」と称して、藩士を四境（藩内）より外へは一切出さず、頭髪の月代も剃ってはいけないこととされ、全員が総髪にして幕府へ恭順の意を表していました。そこで、素太郎は名前を塩間鉄造と変え、頭髪も単に束ねた野良にして太宰府に赴いたのです。恐らく危険な旅であったでしょう。その太宰府に於いて素太郎は坂本龍馬に会い、坂本を木戸孝允に紹介する橋渡をして薩長同盟の端緒役となった



坂本龍馬（萩博物館蔵）

のです。

前掲した「楳取素彦翁談話」の中から、それにかかわる部分を紹介しましょう。

「私が太宰府へ行く時分には、既に其事（薩長同盟）はどうしてもやらなければならぬ、と言つ話があつて、私が太宰府へ行く途中で、例の大山格之輔（初代鹿児島県令）と会ひて茶店で話し、（中略）別れるとき、『私（大山）はこれから京都へ上がるが、（中略）毛利家の方の考えはどうか』と云つから、『其れは格別はない、お前の考えを一応聞いてみても、どうしても薩長が反目しては事が行われぬ、どうかして協力しなければなるまいと思つから、其の辺は安心するがよい』（中略）と云つて茶屋で別れた。

それから太宰府に着くと安芸守衛と云う人が来て、（中略）坂本龍馬に会つてくれぬかと云うので、（中略）坂本龍馬は『斯様に薩長が反目しては天下のことが思つようにならぬ、其の辺の考えがあるから貴様にも一応話して置きたい、（中略）馬関に木戸が出てきているから、木戸に会つて話そうと思つ、仲介して欲しい。（中略）』そこで、『それは容易なことで、貴様の考えも、私の今此処で出先の考えも先ず同一の事である。木戸に於いても格別の異論はあるまいと思つ。』（中略）私からすぐに手紙を書いて出した処が、その返事が速やかに来て、『それは差し支えないから、坂本なる者に来て可宜しい云つてくれ』（中略）と木戸から手紙で言つて寄越したから、その手紙を坂本龍馬に見せて、薩長連合の端が啓けたようなものじゃ。』



木戸孝允（萩博物館蔵）

Q6、幕府との折衝はどのように行っていましたか。

幕府は、恭順の意を表した山口藩（文久三年以後の藩名）に対しいろいろ指示してきましたが、慶応元年（一八六五）二月、正義派が復権を果たした藩内では幕府の命に服さず、山口藩は幕府への伏罪使の派遣にも応じませんでした。

十月、幕府との応接のため、重役井原主計の付添役として素太郎が広島へ派遣されました。井原らの一行はわざと行程をゆっくりとり、十日間もかけて同月二十二日、ようやく広島に到着しました。そして、広島に到着すると、正使の井原は急遽帰藩したので穴戸と素太郎が正・副使となり幕吏と対決しました。幕府は長州再征の口実を得ようと、大目付永井尚志に穴戸や素太郎らを喚問し、七時間におよぶ厳しい尋問を行いました。成果を上げることが出来ませんでした。そこで、やむなく永井は本営の大坂に帰り、復命に基づいて山口藩の処分案を検討しました。

翌慶応二年（一八六六）五月朔日、幕吏小笠原は再び穴戸と素太郎の両名を喚問し、両名を不審の点があるとして広島藩内に拘禁しました。この幕府の卑劣な行為に対して、長州藩内では大いに憤慨し、逆に打倒幕府に火をつけることになりました。この拘禁は、素太郎にとっては二度目の入獄であり、今度こそは死の覚悟を決めたに違いありません。拘禁された獄中での和歌には素太郎の覚悟の程が見えます。

さみだれに 残る花さへ ぐちはてて それとも見えぬ 大和撫子

Q7、四境戦争においてはどのような立場をとりましたか。

かくして、長州軍対幕府軍の戦闘が慶応二年（一八六六）六月七日に開始されます。

幕府による第二次長州征討を長州藩では四境戦争と称しています。長州軍は大島口、芸州口、石州口、小倉口の四境の各地で、本藩兵、奇兵隊などの諸隊、及び四支藩兵が組織化され、一丸となって幕府軍を中心とした諸藩連合軍に対して善戦しました。幕府側は長州藩を第一次の長

州征討の際と同じく、簡単に制圧できると考えていたようですが、長州軍は意外に手強く、幕府軍は予想外の苦戦を強いられました。特に石州口での戦いは大村益次郎の指揮の下に、長州軍は連戦連勝で幕府軍を圧倒しました。

なお、素太郎が橋渡しをした坂本龍馬の仲介により、慶応二年（一八六六）一月には薩長同盟が結ばれ、薩摩藩が側面から援助したことも長州軍勝利の一因に挙げられます。

幕府側の広島本営の老中本庄宗秀は、専断を以て山口藩との停戦を画策し、六月二十五日には拘禁中の穴戸と小田村の両名を呼び出し、帰藩して停戦を周旋するように要請しました。素太郎らは本庄の要請は受け入れられないと断りましたが、両名の周旋に望みを託した本庄は両名を解放したのです。

Q8、敬親公にとってはどのような存在だったのですか。

慶応三年（一八六七）九月、藩命により楢取素彦と改名し奥番頭職に就任しました。奥番頭は藩主に最も近接して勤務する役で、幕府や他藩では専ら「側用人」と称し、特に藩主の信頼がないと勤まらない役職で、藩主敬親が如何に楢取を重用したかを示す役職でもありました。

十一月、楢取は三たび太宰府に五卿を訪ね、折り返し帰藩すると諸隊参謀として西宮に着陣し、十二月には諸兵を率いて入京しました。

慶応四年（一八六八）正月三日から五日にかけて、京都南部の鳥羽・伏見を舞台に、薩長を中心とする官軍と、大坂から攻め上った会津、桑名両藩を中心とする幕府軍が衝突して鳥羽伏見の戦が始まりました。

楢取は山口藩を代表して禁中に勤務し、木戸孝允、広沢真臣、井上馨、伊藤博文とともに「徴士参与職」に任命されました。しかし、藩は藩主敬親の信任篤い楢取を国へ出向させることを認めず、二月には楢取の徴士参与職を辞して奥番頭に復帰させ、敬親公の駕に従って帰国させまし

た。今や楢取は、藩主敬親にとっては無くてはならない側近中の側近として存在し、いわば、敬親公の分身とも云える存在となっていました。

明治元年（一八六八）から翌年にかけての戊辰戦争が終結し、国内に漸く平穏な日々が戻ったと思われた明治二年（一八六九）十二月一日、山口藩の脱隊兵約二千人が防府宮市に屯集し、藩の兵制改編反対、除隊者の生活保護等を藩に要求しました。藩政府は防府の勝坂口や小郡の柳井田に閘門を築き、防備の準備を整えるとともに、世子元徳が脱隊兵の主だった者を集めて説得しましたが不成功に終わりました。そこで、諸隊に人望のある楢取や吉田右一らを政事堂用掛、高杉小忠太、野村素助などを参事として脱隊兵の鎮撫に当たらせました。翌二年（一八七〇）正月には、藩主敬親は四支藩知事に木戸孝允を加えて収拾策を検討したが結論は出ませんでした。その後、脱隊兵は山口の藩主公館を取り巻き、遂には公館内に乱入し暴徒化して、その数は一段と増え危険な状況となりました。楢取は鯖山方面の脱隊兵鎮撫のため、十二月には奥番頭を兼ねて三田尻管掌に就き鎮撫に努めました。

結果的には、彼等脱隊兵は藩の正規軍により武力鎮圧され、多くの処分者を出す結果となりました。

明治三年（一八七〇）二月、楢取は根役の奥番頭を兼ねて山口藩の権大参事に就任しました。しかし、三月には脱隊騒動兵への説得が不成功に終わり、結果的には多くの処罰者（斬首者三二名ほか）を出したことの責任を取って、藩の政府員は総辞職することになりました。楢取も権大参事の要職を離れましたが、未だ不穏な空気が残っていたのででしょうか、三田尻管掌を引き続いて務める様に命ぜられました。

戊辰戦争の余燼くすぶる明治二年（一八六九）二月、勅使万里小路（までのこうじ）が明治天皇の勅命を帯びて山口に下向した際には引受用掛を務め、その勅命に促されて、上京する敬親公に付随して京都に上り、宮中に参内しました。勅命の内容は、敬親公に上京を促し、「新政府内で天

皇を補佐せよ」ということでした。ところが、当時、敬親公は体調が思わしくなく、誕生して間もない新政府の激務をこなすだけの体力がなくなっており、お断りするために上京したのです。

明治四年（一八七二）の三月、長年に亘って全幅の信頼を頂いた藩主敬親が逝去しました。榎取素彦の手廻組としての勤務中は勿論、側近として仕えた敬親公の逝去に、榎取の心中には大きな空洞が開いたに違いありません。敬親公については、人は「公は人を見る目があつた」と称していますが、正に榎取を重用し、十二分に活躍の場を与えたのは敬親公その人でした。

明治元年（一八六八）六月、参内して龍顔（明治天皇）を拝した敬親公は、弱冠十六歳の天皇から、

「内外大難を凌ぎ鞠躬尽力し 終に朝廷をして今日有るに到らしむ 偏に汝至誠の致す処 感喜述るに辞なし」

との優詔を賜って感激しています。優勅を賜った裏には、「敬親公の懐刀」榎取素彦の活躍も忘れることは出来ません。

その敬親公の逝去による支柱を失ったこともあって、榎取は家族と共に大津郡三隅村に隠棲することになりました。

Q9、明治維新直後は、どのように過ごしましたか。

明治五年（一八七二）二月、隠棲していた榎取素彦は、相模国足柄県へ七等出仕の辞令を受けて赴任しました。程なく同県の参事に昇任しますが、それにしても、雄藩山口藩のナンバー3である権大参事に就任していた榎取にとっては、地方官としてのスタートはいささか軽職の感がありました。

その榎取に転機が訪れたのは、明治七年（一八七四）七月、熊谷県の権令（副知事）に転じ、十一月には正六位に叙せられてからです。明治九年（一八七六）四月には、昇格して熊谷県令（知事）に就任し、従五位に叙せら

れ、八月には熊谷県が群馬県と改められて初代の群馬県令となりました。榎取群馬県令は、教育と産業を二本柱として、群馬県発展の基礎づくりをしたと評価されています。特に教育振興に尽くした業績は大きいものがありました。

『群馬県百年史 上巻』には、

「榎取の熊谷県時代は、現在の群馬県政の基盤がこの時築かれたと云って良いほど、重要な仕事が多岐に亘り行われた。暢発学校の設立、地租改正、県機構の整備、大小区集会の開催、産業・教育・土木・衛生・その他革新的な新事業が施行された。榎取素彦は人格識見学識が高く、歴代群馬県知事中随一と云われる人である」

とあります。

上州（群馬県）は江戸時代から養蚕業が盛んでしたが、明治五年、富岡に官営の製糸場が誕生したことが刺激となって、民間でも製糸業が盛んに行われ始めました。当時、日本の輸出品の主力は生糸であったので、群馬県産の生糸も開港場横浜を経由して欧米へ盛んに輸出されました。

明治十年（一八七七）前後には、さらに県下各地で相次いで器械製糸所が設立され、後の「養蚕王国群馬」の基礎が築かれています。正に榎取県政下における殖産興業の振興政策の一環でした。

平成二十六年（二〇一四）、群馬県では富岡製糸場が世界文化遺産に登録され、かつ、国宝にも指定され、多くの観光客で賑わっています。

また、教育振興の面では、群馬県学則、小学校規則、中学校規則、県立医学校規則、師範学校規則などを相次いで制定して諸学校を設立して教育の充実をはかり、一方では、児童の就学を促進した結果、榎取在職中の群馬県児童の就学率は全国平均四〇パーセントをはるかに上回って七〇パーセントにも達し、全国有数の教育県となっています。

Q10、その後、国政にはどのようにかわりましたか。

明治十七年（一八八四）、楫取は長年勤めた群馬県知事職を離れ、元老院議員に就任し、その翌々年の十九年（一八八六）には勅任官一等となり、高等法院陪席裁判官に就任しました。そして、その翌二十年（一八八七）には、勲功により華族に列して男爵に叙せられています。

明治二十三年（一八九〇）一月、貴族院議員に当選し、錦鶏間祇候を仰せ付けられました。そして、同二十六年（一九八三）には山口県への貴属替えを申請して許され、三田尻岡村の地を終の棲家と決めました。そして、帝国議会の開催期間には三田尻・東京間を往来して議員として国政に参与し、第七回帝国議会召集の節には国政に節精し励んだとして銀杯一組を下賜されています。

明治三十年（一八九七）、六十九歳時には貴族院議員に再選され、同三十七年（一九〇四）には重ねて貴族院議員に三選されています。

明治三十年（一八九七）八月、楫取は皇女降誕の御用掛を仰せつかりました。その九月、明治天皇第十皇女貞宮多喜子内親王が降誕されると、楫取は貞宮御養育主任を仰せ付けられ、妻の美和子も養育掛を勤めることとなり、職務上三田尻を離れて東京住いとなり、翌年には宮中顧問官に任命されました。

ところが、翌三十二年（一八九九）一月、大切に養育してきた貞宮多喜子内親王が薨去しました。楫取は同内親王の葬祭の喪主を務めています。その後、多喜子内親王御在世中より薨去までの尽力に対し、両陛下より花瓶一對と金五千元が下賜されています。

楫取素彦の薨去は、大正元年（一九一〇）八月十四日（のことです。享年八十四歳。防府桑山墓地に埋葬されました。

Q11、二人の妻——寿と文——は、どのような生き方をしたのですか。

楫取の妻寿と文は、共に藩士杉百合之助の娘で、かつ吉田松陰の妹にあたります。最初の妻寿は真宗の信仰心に篤く、心温かい人でした。の

ちには信者の中でも特に信仰心の厚い「妙好人」（真宗門徒の中でもきわだつて「篤信」な人）と称されるほど深く真宗に帰依していました。明治維新後、素彦と大津郡三隅村に隠棲した際、地元の子孫に御恩報謝の念願を果たそうとして御堂を建て、西本願寺の広如上人御筆「南無阿彌陀佛」の御名号を掛けて部落の人を集め、僧侶を招いて毎月二回「無量講」を開きました。この「無量講」はその後も連綿と続けられ、現在も部落の二二戸が互いに当家となって続けています。

素彦が群馬県令在任中の偉業に真宗本派本願寺派の教誨事業がありました。この政策は、妻寿の熱心な勧めによるものでした。当時の上州地方は仏教の信仰心が薄く無教地で、真宗の寺院も稀でした。それに当時の上州の民情は想像を絶するほど荒々しかったそうです。そこで、この地方を仏教で潤せば、民心も自ずと穏和になり、政令も自然に行き届く基になるというのが本旨でした。そこで、素彦は本願寺築地別院を訪ね、



長門市三隅二条窪
現在も無量講の行われている御堂

教導僧の派遣を要請しました。

その結果、別院は山口県出身の小野島行薫を教導僧の適任者として群馬県に派遣しました。小野島を迎えた楫



楫取寿（萩博物館蔵）

取と寿は、小野島の名法話を獄舎で苦しむ囚人に聞かせたいと考え、行熏を監獄に派遣して教誨を実施することにしました。そのため、楳取は必要な予算を県費に計上して実施したのです。この予算措置は全国に先駆けた措置でした。

寿の妹文は、兄吉田松陰の門下生

で勤王の志士として活躍した久坂玄瑞に嫁ぎました。玄瑞と文との間には子供がなかったため、文は姉寿の次男久米次郎を大変可愛がっていました。文久三年（一八六三）八月、玄瑞から文に死んでた書翰によると、当時五歳になった久米次郎を養子にするよう提案し、皆様にお願ひしたらどうかと投げかけており、その結果、久米次郎を養子にすることが決まったのです。元治元年（一八六四）正月の久坂書翰では、

「久米次郎事、まいまいり候や、はやはや成長せよかしといのり居候事に候」

と、喜びの気持ちを書き送り、同年七月、禁門の変で死去する一か月前に出した最後の書翰では、久米次郎に出会って添い寝したことや、大小の刀を特別に誂える喜びを書き送っています。久坂と久米次郎との親子の出会い、この一夜が最後となりました。文は未亡人となつてのちの慶応元年（一八六五）九月、久坂美和の名前で主家毛利家の奥方安子様付の女中として奉公し、安子様の子元昭公の誕生後はそのお守り役として勤めていました。母滝子は、明治十四年（一八八二）妻寿を亡くした素彦が、子や孫を抱えて困っていることを知り、美和に素彦との再婚を勧めました。美和はその母の勧めに従って素彦との再婚に踏み切ったのです。明治十六年（一八八三）、美和は一旦杉家に復籍し、改めて杉家の三女として楳取素彦に嫁いだのでした。素彦五十四歳、美和三十九歳でした。



楳取美和（萩博物館蔵）

おわりに

NHK大河ドラマ『花燃ゆ』を見てお気付きかと思いますが、本拙文の「楳取素彦」像とテレビ上の「楳取素彦」像とは大きな違いが有り、違和感を覚えられるのではないのでしょうか。

本拙文はあくまでも「史料」に基づいて記述した「楳取素彦」像ですが、NHK大河ドラマ『花燃ゆ』は「ドラマ（創作劇）」であって、そこに出演する楳取素彦は、ドラマを構成するために創作された「楳取素彦」像です。従って、楳取の実像とドラマ上の楳取との間に違和感が生じることは、やむを得ない事だと思えます。

その違いを認識しながら、大河ドラマ『花燃ゆ』を楽しんで頂ければと思っています。

〈参考文献〉

- 「楳取素彦翁談話」（毛利家文庫）
- 『楳取素彦史料』（東大史料編纂所編）
- 『吉田松陰日録』（公益財団法人松風会編）
- 『増補訂正 もりのしげり』（時山弥八著 復刻版 赤間閣書房）
- 『山口県史 史料編 幕末維新6 別冊「長州諸隊一覽」』（山口県発行）
- 『群馬県百年史 上巻』（群馬県編）
- 『群馬の教育百年』（群馬県教育委員会編）
- 『関東を拓く二人の賢者』（葦塚一三郎著 さきたま出版会）
- 『黎明』（芝山巖、楳取道明を憶ふ―神野克巳著）

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いてあります。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。

次号は、今年九月発行の予定です。どうぞ御期待ください。